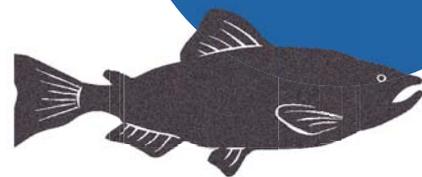
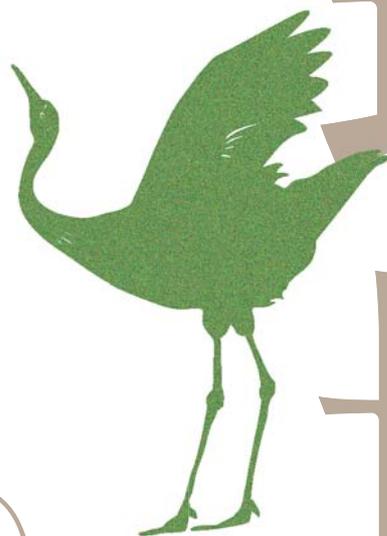


hue

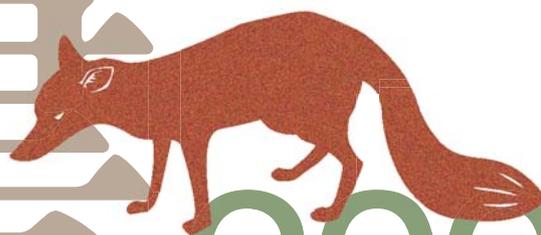
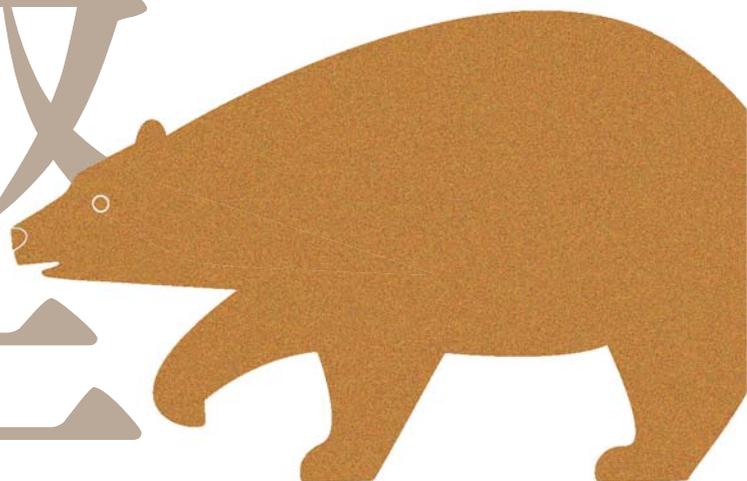


北海道
教育大学

環境
報告
書
2008



Environmental Report



2008

Contents

【報告の対象範囲】

対象組織：北海道教育大学の全ての組織を報告対象としています。

対象期間：2008年4月1日～2009年3月31日※

※一部に2008年4月1日より前、または2009年4月以降の情報を含めています。

編集方針：この報告書の構成等については、環境省発行の「環境報告ガイドライン(2007年版)」を参考に作成しました。

作成部署及び連絡先

〒002-8501

北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1番3号

国立大学法人北海道教育大学

財務部財務課総括グループ

電話 011-778-0224 FAX 011-778-0632

E-mail z-sokatu@sap.hokkyodai.ac.jp

学長メッセージ 1

大学概要 2

特集

G8 北海道洞爺湖サミット関連事業 4

持続可能な社会実現への地域融合キャンパス 6

環境方針と環境保全推進実施体制 8

環境保全計画 9

環境負荷データ・環境会計 10

環境マネジメント状況 11

環境保全への取り組み状況 12

環境汚染物質の管理と排出等について 15

環境教育活動の取り組み 18

学生の環境保全活動の状況 28

社会的取り組みの状況 30

学長メッセージ

エコ・キャンパス実現のために

本学は、「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律（環境配慮促進法）」の施行（平成17年）を受けて、ここに『環境報告書2008』を作成・公表します。

本学としての環境方針及び環境保全計画のもと、2008年度は、環境保全推進本部において行動計画・目標を定め、環境教育部門、資源エネルギー部門、環境安全部門のそれぞれにおける取り組みを推進し、おおむね目標を達成したところです。

環境教育部門では、本学の特色を発揮した環境教育の実施、すなわち大学や附属学校における環境に関するカリキュラムの開発と環境教育の実施、さらには環境教育を通じた地域貢献等に重点的に取り組みました。特に、全学共通科目「環境マネジメント実習」の2009年度全学開講をめざして種々の準備を進め、札幌キャンパスでの試行的な実施を行いました。

特筆すべきは、釧路校を中心に展開される「持続可能な社会実現への地域融合キャンパス—東北海道発ESDプランナー養成・認証プロジェクト—」（平成19年度文部科学省GP「現代的教育ニーズ取組み支援プログラム」採択）です。2年目の2008年度は、2008年8月17日に国際シンポジウム「持続可能な社会への環境教育（ESD）～グローバルな視野と地域での実践～」を開催するなどしました。

資源エネルギー部門では、2007年度と比較して、総エネルギー使用量約4.9%、CO₂排出量を約5.2%削減し、水の使用量を上水道は約3.5%、下水道は約9.0%削減できました。今後も、いっそう削減努力を行います。

学生による主体的な環境保全活動の一例を挙げますと、釧路校では新たに「エコチャリ・プロジェクト」を開始しました。これは、学内にある放置自転車の回収・修理・貸し出しを通して、自転車が資源であり、環境に配慮した乗り物であることを広報する活動です。

さらに、2008年7月7日から9日まで開かれた「G8北海道洞爺湖サミット」に際し、本学は種々の関連行事を催しました。7月5日と6日に「グローバル環境教育国際会議2008」を、また「2008年G8北海道洞爺湖サミット記念 北海道教育大学特別演奏会～5キャンパス附属小中学校と大学生による～」を、7月1日と2日に「環境保全高校生サミット」を開催しました。

地球環境に関するグローバルな要求が高まるなか、本学としても、2009年度には「アクションプラン2009-2011」を策定し、「キャンパス環境」については、「自然との調和をはかり持続可能なキャンパスと快適な生活環境を提供する」ということを盛り込むことにしました。次年度以降も、自然と調和した持続可能なキャンパスの実現に向けて全構成員とともに着実な歩みを進めていく所存です。



北海道教育大学長

本間 謙二

2009年（平成21年）9月

大学概要

北海道教育大学の教育理念

1 先進の人間教育

教育の活動は、人が育ち成長することへの飽くことなき関心と情熱から始まる。北海道教育大学の教育は、現代の人間と子どもについての先進的で深い知見と体験を根底に置き、人を育てることの喜びと尊さの自覚を不断に醸成する。

2 行動する教養

21世紀の社会と教育は、文理融合の複合的な教養、他者と積極的に関わり共存する柔軟な人間性を求めている。そのためには、芸術やスポーツを含めた多様な実践と体験に基づく、豊かで、社会に広がりを持つ人間性の育成が不可欠である。北海道教育大学の教育は、創造し行動する教養を旗印として現代の教養教育を展開する。

3 高い志の涵養

教育には、人のために生きる高い志が不可欠である。現代の教師には、子どもたちが抱える困難をわがこととして受け止める感受性が求められる。21世紀の地域と国際社会の諸課題への挑戦にも、同様の志が求められる。北海道教育大学の教育は、その全体を通して高い志の涵養をめざす。

本学配置図

札幌 東京から約 1180km
札幌市北区あいの里
5条3丁目1番5号

旭川 札幌から約 137km
旭川市北門町9丁目

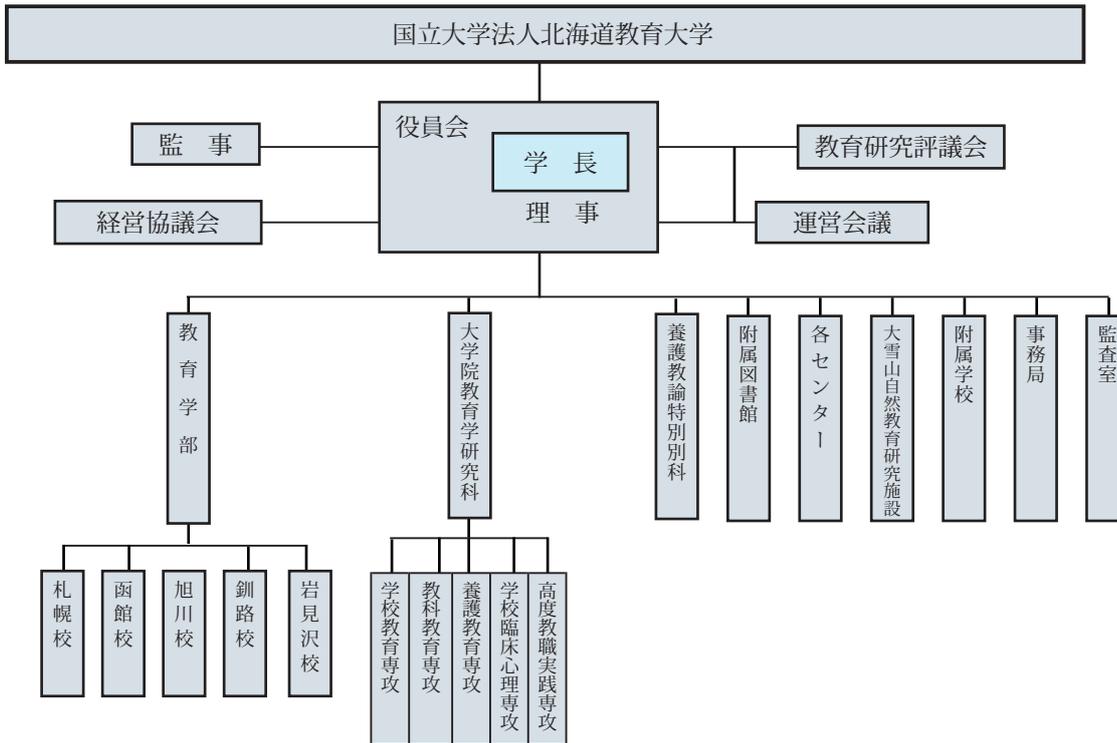
釧路 札幌から約 349km
釧路市城山1丁目15番55号

函館 札幌から約 319km
函館市八幡町1番2号

岩見沢 札幌から約 41km
岩見沢市緑が丘2丁目34番地1

※距離数は、JRの営業キロを示す。

組 織 図



職員・学生数

2009年5月1日現在

- ①大学名：国立大学法人北海道教育大学
- ②所在地：札幌校・事務局……札幌市 函館校……函館市
旭川校……旭川市 釧路校……釧路市
岩見沢校……岩見沢市
- ③学部等の構成：教育学部，教育学研究科，養護教諭特別科，
附属小学校，附属中学校，附属特別支援学校，附属幼稚園
- ④学生等数及び教職員数（単位：人）

学 生	学部	5,360 (6)
	研究科	380 (10)
	養護教諭特別科	27
	計	5,767 (16)
児童・生徒・園児	附属小学校	1,830
	附属中学校	1,468
	附属特別支援学校	58
	附属幼稚園	147
	計	3,503
教 職 員	大学	382
	附属小学校	75
	附属中学校	71
	附属特別支援学校	28
	附属幼稚園	10
	職員数	215
	計	781

※（ ）内の数字は，外国人留学生を内数で示す。

特集 1 G 8 北海道洞爺湖サミット関連事業

本学では、平成 20 年 7 月 7 日から 9 日の期間に開催された「G8 北海道洞爺湖サミット」に際し、グローバル環境教育推進会議 (Glocal Environmental Education Promotion Committee) を立ち上げ、環境教育に関する様々な取り組みを行いました。

グローバル環境教育国際会議 2008 を開催

北海道教育大学では、平成 20 年 7 月 5 日 (土)、6 日 (日) の両日、「グローバル環境教育国際会議 2008」を開催しました。

この会議は、7 月 7 日 (月) から開催される G 8 北海道洞爺湖サミットに対応し、サミットで扱われるべき世界的重要課題に関して、開催地唯一の教育大学としての国際的・国内的・地域的責任を果たす中心となることを目的として実施したもので、釧路校が中心として展開している、文部科学省現代 GP 選定プログラム「持続可能な社会実現への地域融合キャンパス」のサテライトミーティングとしても行われ、会場となった札幌キャンパスには、多くの方にお越しいただきました。

開会式では、本間謙二学長から、長年にわたり環境教育を実践してきた本学が、この機会に国際会議を開催することは使命であり、この会議をおして世界中に環境教育への取り組みが共有されることを祈念するとの挨拶がありました。

開会式後の基調講演では、同大グローバル国際会議実行委員長の氷見山幸夫旭川校教授から、環境教育はそれぞれ国や地域の事情に左右される傾向が強く、地球規模の問題への理解と課題への対応が遅れており、環境教育の改善と普及振興は必須であるとの提言がありました。神田房行釧路校教授からは、持続可能な社会の実現に向け、環境教育のみならず各人が実現に繋がる具体的な行動を組み込んでいく必要があるとの提言がありました。

同日の午後には、国際惑星地球年国内委員会 佃栄吉氏、国連大学高等研究所 谷川潔氏ほか、世界各国からのゲストスピーカーによる環境教育と持続可能な世界のための提言がありました。

2 日目は、前日同様ゲストスピーカーから、学校教育の視角からみた環境教育の教育的価値や、釧路校における ESD 推進センターの取り組みを例に、持続可能な社会の実現に向けた提言などがあり、また、午後に行われた分科会では、各機関における環境教育への取組に向けた提言がありました。

最後に行われた全体会議では、全世界的な問題である環境汚染、環境破壊と、それに対応する手段としての環境教育の役割など、活発な意見交換が行われ、2 日間の会議であげられた提言をひとつの提言として、まとめあげました。

また、2 日間を通して、構内では、環境教育に関連するポスター展示や、ポスターセッションも行われ、大学と市民とが、環境教育について考える貴重な機会となりました。

International Symposium on Glocal Environmental Education 2008
グローバル環境教育国際会議 2008
参加無料
2008年 7月5日(土) 6日(日) 5th(Sat)-6th(Sun), July 2008
会場：北海道教育大学 札幌キャンパス
Venue: Hokkaido University of Education, Sapporo Campus
Address: Amato, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido

主催：北海道教育大学
協賛：日本学術会議、国連大学、環境省、北海道、札幌市、EPE 日本
協力：Hokkaido University of Education
Sponsor: The Government, Hokkaido Prefecture, Sapporo City, EPE Japan, Hokkaido Univ. J. B.



2008年G8北海道洞爺湖サミット記念 北海道教育大学特別演奏会

～5キャンパス附属小中学校と大学生による～

本間学長の提案でG8北海道洞爺湖サミットを記念し、自然環境を守り世界平和を願うためのアピールを音楽を通じて行うために北海道教育大学の5つのキャンパスの音楽コースの学生と附属小中学生による合同演奏会が開催されました。音楽会は附属小中学校ステージと5キャンパス大学生合同ステージの2部構成で行われましたが、特に小中学生の合同演奏の「大地讃頌」、大学生合同演奏の「森の歌」は感動的でした。今回のような催しは北海道教育大学開学以来のことで、北海道教育大学の芸術教育の長い歴史の積み重ねを感じさせる内容のある音楽会となり高い評価を得ました。また、友情出演で岩見沢校市立緑中学校合唱部の生徒さんたちの参加もあり音楽を通じての交流が行われました。



環境保全高校生サミットを開催

渡島管内に在住する高校生を対象に、北海道教育大学函館校及び、渡島高等学校環境教育研究会が主体となり、環境保全高校生サミットを実施しました。渡島大沼の水質汚染問題を事例として、北海道の湖が現在直面している環境問題とその原因及び解決方法について学習と協議を深め、若者の立場から北海道の貴重な自然環境を保全し未来の世代に伝えるための提言を行うことを目的として企画されました。2008年7月1日～2日の2日間にわたり行われ、1日目に大沼とその周辺地域の野生動植物の観察、河川における水質検査等、2日目には水質汚染問題の解決と持続的な地域産業の確立による解決策について協議し、「大沼環境保全アピール」の作成、発表を行いました。具体的には、漁業・農業・観光の3つの側面から提案を作成し、報道機関向けに発表を行いました。本事業後の参加者の高校生からのアンケートにおいても高い評価を得ており、事前学習やサミット討論の過程で深い学習を促すことに成功したと思われる。加えて、本事業後に後援団体の一つである七飯町から、高校生が策定した「大沼環境保全アピール」に対して何らかの回答を用意したいとの連絡があるなど、大沼の環境を管轄する団体にも大きな影響を与えることができました。今後とも毎年、高校生サミットの開催を継続することが計画されています。



特集 2 持続可能な社会実現への地域融合キャンパス

現代G Pプロジェクト

本プロジェクトは、本学釧路校を「地域融合キャンパス」に見立て、そこをベースにして教科融合型の実践的カリキュラムを実践し、地域の課題に取り組み、地域と連携することができる人材を育成する取り組みです。19年度に文部科学省により選定され、2年度目の20年度も釧路校地域教育開発専攻の教員が中心になって活動しました。

20年度の取り組みも基本的に19年度と同様でしたが、以下のような事業を新たに行い、質・量ともに発展させることができました。

「E S Dプランナー」の養成と認定

「E S Dプランナー」資格の認定のための授業公開講座の開講数を前期15本、後期12本まで増やすとともに、ポスターや案内パンフレットを印刷・配布するなどして受講者を積極的に募集しました。その結果、前後期あわせて延べ18名の市民の受講があり、学生と市民が机を並べて学習することで、授業にもほどよい緊張感が生まれました。この効果もあり、21年3月に、初のE S Dプランナー認定申請に一般市民1名と本学学生5名の応募がありました。応募資格を満たしていた市民1名、学生3名にE S Dプランナー資格が認定され、蛭田眞一副学長（釧路校担当）から認定証が授与されました。



E S Dプランナー資格授与式

E S D国際シンポジウムの開催

7月9日（水）釧路市観光国際交流センターに、国際シンポジウム「持続可能な未来をつくる環境教育～グローバルな視野と地域での実践～」を開催しました。アメリカ、オーストラリア、中国から各1名、国内から1名の計4名をゲストとして招き、地球環境の危機と環境教育、教育改革に向けた社会生態学、地域教育とアラスカ先住民の知恵、中国の環境教育、持続可能な社会のための環境社会教育等のテーマで、研究成果の発表があり、その後、活発にパネルディスカッションが行われました。環境教育を進める上で、人々がコミュニケーションを図りながら共通理解を導き出すことが大切であることなどを、参加者は受け止めたようです。また、シンポジウムの成果を報告書にまとめ、他大学や教育関係機関に配布しました。



E S D国際シンポジウム

現代G Pとは

「現代G P (Good Practice)」とは、文部科学省が、平成16年度から、各種審議会からの提言等を踏まえ、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマ設定を行い、各大学等から申請された取組の中から、特に優れたプロジェクト（取組）を選定し、財政支援等を行うことで、高等教育の更なる活性化を図ることを目的として実施している事業です。

「E S Dプランナー」とは

釧路校が独自に認証する資格で、自然環境やその持続可能な利用についての知識と、生きがいのある地域社会づくりを促進していく実践力を持ち、ファシリテーターとして地域の自然再生や地域社会の再活性化のためのアイデア創出と具体的な活動を行う人材です。

ESD推進センターの設置

釧路校は、ESD についての調査・研究、持続可能な社会実現を目指す教員や地域活動人材の育成支援、地域と連携した ESD 活動の推進を目的とした、「ESD 推進センター」の設置を9月に決定し、生方秀紀教授が初代センター長に就任しました。10月にはセンターの開所式が行われました。このセンターは本GPプロジェクトの計画の中に構想が掲げられていたもので、これまで10年間、研究紀要の発行、環境教育に関するイベントの開催に取り組んできた「環境教育情報センター」を発展的に改組して発足したものです。ESD 推進センターでは更に活動の幅を拡げて、研究紀要（「ESD・環境教育研究」に改題）の継続発行に加えて、上述の「ESD プランナー資格」の認証、公開講座の実施、ESD 活動における大学教員・学生と地域の個人・団体との連携・協働の促進などに取り組んでいくことにしています。



ESD推進センター開所式

ESD連続講演実施

11月から3月にかけて、連続講演会「ESD・リレーセミナー：世界の環境とESD～見たこと考えたこと～」を11回シリーズで実施し、9名の釧路校教員（現代GP関係教員）がマレーシア、オーストラリア、インド、ドイツ、イギリス、アラスカ、沖縄、屋久島、水俣、諫早、四日市、八郎潟、白神山地でのESD・環境教育の視察調査について報告し、各回数名から二十数名の学生・市民の参加者が熱心に聴講しました。



ESDリレーセミナー

平成20年度 ESDプランナー関連公開講座一覧

講座名	講座名
釧路湿原エコウォッチング	環境教育活動Ⅲ D
アドベンチャー教育A	環境教育活動Ⅲ E
子どもと環境教育	環境教育活動Ⅲ F
環境教育活動Ⅰ A	地域ボランティア
環境教育と産業トライアル	地域教育活動Ⅰ
東北海道アウトドアトライアル	環境教育活動Ⅱ
環境教育プランニング演習Ⅰ A	アドベンチャー教育演習Ⅰ
環境教育プランニング演習Ⅰ B	環境と産業技術
地域の生態系演習Ⅰ	地域社会と環境
地域健康教育コーディネート	地域の自然環境
環境教育と農業演習Ⅰ	環境リテラシーA
環境教育活動Ⅲ A	地域社会と環境演習Ⅰ
環境教育活動Ⅲ B	工業と環境教育演習Ⅰ
環境教育活動Ⅲ C	



公開講座授業風景



公開講座授業風景

本学の使命は、北海道の歴史と風土に根ざしつつ、教師をはじめ地域のための優れた人材を養成し、さらに、教育、研究及び社会貢献活動を通じて、社会の発展と人類福祉の向上に貢献することです。この使命に相応しい大学環境を構築し、環境に関わる世代間の平等を尊重する社会人の育成に努めます。

基本方針

本学の基本理念に基づき、各キャンパス内の全ての教職員及び学生等の協力のもとに、以下の活動を積極的に推進します。

①本学の特色である文系と理系の知恵を集積し、また附属学校や近隣の学校と連携し、北海道教育大学としての特長を活かした環境教育と研究の実践を進めます。研究成果の普及により、地域環境及び地球環境の改善に努めます。

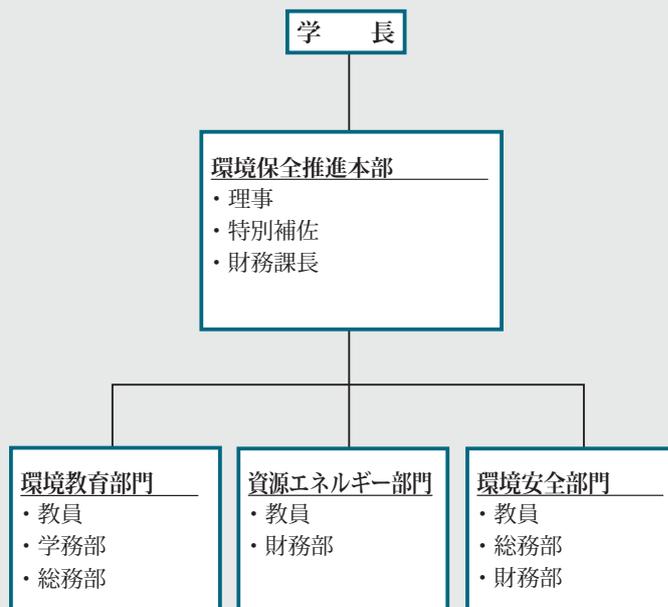
②教職員及び学生等全体で快適な学内環境の構築に努めます。学生の主体的な参加によって実施するために、学生による自主的な環境活動を推奨し、多様な環境プログラムが実施されるキャンパスを目指します。

このことにより、環境改善に資する能力を持った人材育成に努めます。

③省資源、省エネルギー、廃棄物の減量化及び化学物質の適正管理などにより、汚染の予防と継続的な環境改善を行います。これらにより環境負荷の少ない快適なキャンパスを実現します。

④本学に適用される環境関連の法令及び本学が決めた事項を守ります。

環境保全推進実施体制



【担当事項】

①学生のボランティア活動	①総エネルギーの投入量	①基本理念
②大学における環境カリキュラムの実施	②総物質排出量	②周辺地域との連携
③附属学校における環境教育	③水資源投入量	③環境に配慮した施設・設備
	④温室効果ガスの排出量	④環境関係法令に基づく対応等
	⑤廃棄物等総排出量	
	⑥総排水量	
	⑦グリーン購入・調達状況	

北海道教育大学では、年度目標・計画等に基づき、環境保全活動を行っています。

■ 達成目標及び達成評価

項目	対象	目標	実施したこと	自己評価
エネルギーの有効活用と節約の推進 【適用法令】 エネルギーの使用の合理化に関する法律	電気使用量 ガス使用量 上下水道使用量 省エネへの啓発 (シール等)	中期計画期間6年間において、前年度比1%減する。	ポスター掲示等による省エネの啓発、外断熱工事の実施や高効率トランスへの更新、人感センサーの設置、トイレへの擬音装置の設置等により、電気使用量2.0%、ガス使用量7.0%、上水道使用量3.5%、下水道使用量9.0%を削減した。	◎
資源の有効利用とリサイクルの推進 【適用法令】 資源の有効な利用の促進に関する法律	新聞紙	リサイクルを実施する。	回収場所を設置し、リサイクルを実施した。	○
	トナー	リサイクルトナーを利用する。	リサイクルトナーの利用。	○
	廃棄物の分別・排出量 可燃物・紙類・ビン・カン ペットボトル・不燃物 (発泡スチロール)	分別収集、リサイクルを実施する。	今まで廃棄していたシュレッターくずのリサイクル実施や回収BOXを増設し、リサイクルを実施した。	○
グリーン購入、調達状況 【適用法令】 国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律	グリーン購入対象物品等	グリーン購入100%を達成する。	グリーン購入100%を達成した。	◎
環境汚染の防止 【適用法令】 下水道法 労働安全衛生法 ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法(PCB特別措置法) 大気汚染防止法	有害物質の適正管理と廃棄の現状	法律に基づいた適正な管理と廃棄を行う。	法律に基づいた適正な管理と廃棄を行った。	◎
	作業環境の測定	適正な環境を図る。	適正な環境を図った。	◎
	PCB	2016年度までに処理する。	適正に管理を行った。(2016年度までに処理予定。)	◎
	排水	排水基準値を遵守する。	排水基準値を遵守した。	◎
環境教育活動の取り組み	環境教育関連科目の開設	一層の環境教育活動への取り組みを推進する。	全学共通科目「環境マネジメント」を開設した。	◎
	附属学校・園における環境教育		附属学校における環境教育活動への取り組みを推進した。	◎
	地域貢献(社会貢献) 教員の社会貢献 高校生への出前講義		環境教育活動への取り組みを行った。	◎
学内美化	キャンパスクリーン	学内清掃を実施する。	年2回、学生を交えて学内清掃を行った。	◎
	放置自転車	放置自転車を0にする。	学生による放置自転車のリサイクル活動の実施を行った。	○
	分煙 【適用法令】 健康増進法	学内分煙を推進する。	快適な教育・職場環境作りの一環として、及び教員養成を図る大学としての在り方等を考慮して、平成20年4月より、本学敷地内全面禁煙を実施した。	◎
	緑化	緑化を推進する。	計画的に緑化を行った。(植樹、花壇の整備等)	○
学生の自主的な活動			学生による、環境保全活動が実施された。	○

※自己評価の指標

◎…目標を達成できた計画

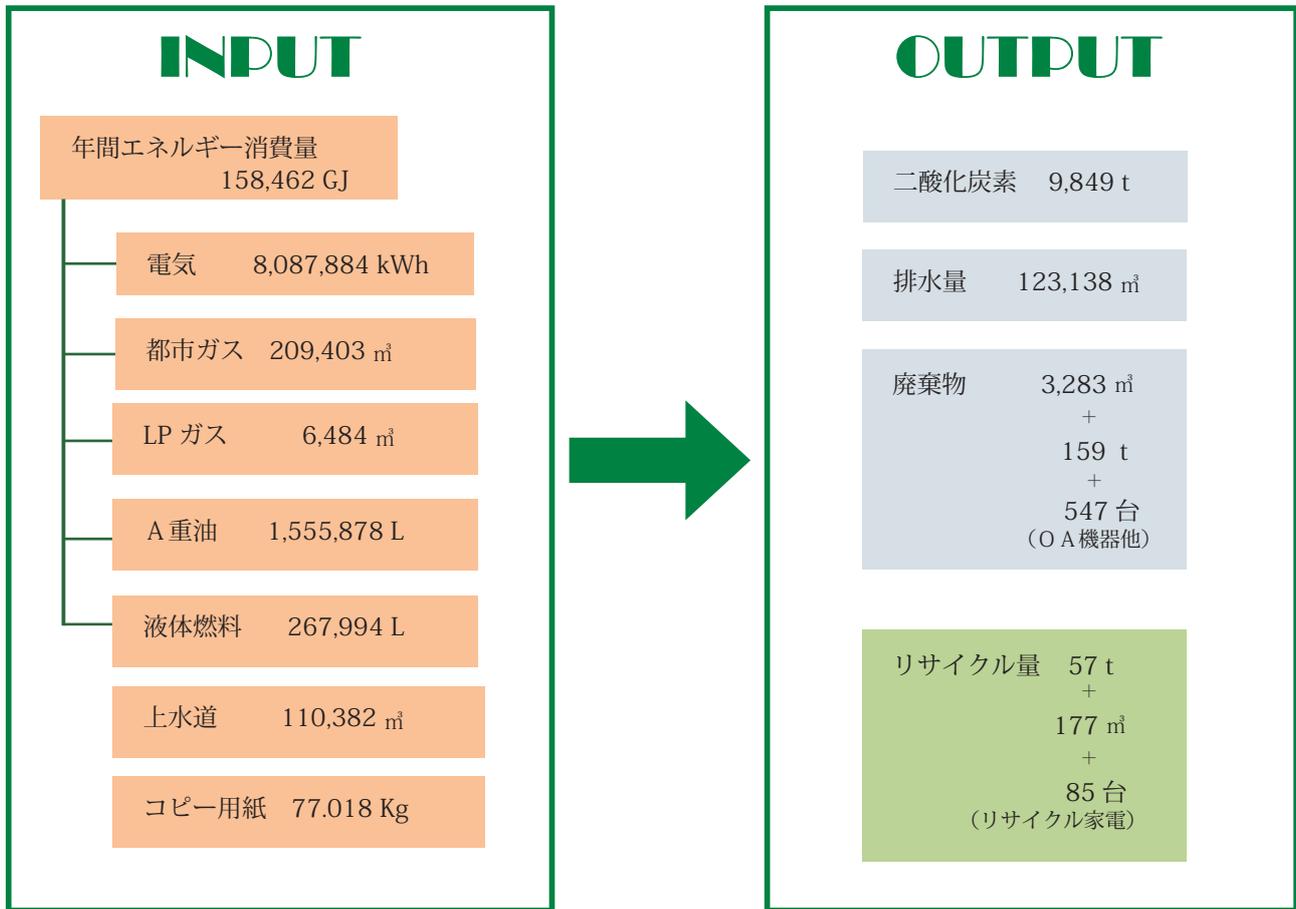
△…目標の半分を達成している計画

○…おおむね目標を達成した計画

×…目標を達成できなかった計画

環境負荷データ・環境会計

2008年度に使用した電気・水道・ガス等のエネルギー，紙資源使用量及び環境へ排出する二酸化炭素，排水量，廃棄物を集計しました。



北海道教育大学の環境保全活動の主な取り組み内容について，環境省ガイドラインの分類を参考にコストを集計しました。これは，2008年度の数字で表す北海道教育大学の環境保全コストになります。

単位：(円)

分類	主な取り組みの内容	コスト額	うち投資額	うち費用額
(1) 事業エリア内コスト		6,848,508	376,890	6,471,618
内 訳	公害防止コスト	4,029,407	0	4,029,407
	地球環境保全コスト	2,491,951	376,890	2,115,061
	資源循環コスト	327,150	0	327,150
(2) 管理活動コスト	キャンパスクリーン，害虫駆除等	606,545	0	606,545
(3) 研究開発コスト		—	0	0
(4) 社会活動コスト	グローバル環境教育会議等	4,419,519	0	4,419,519
(5) 環境損傷対応コスト	汚染負荷量賦課金	101,700	0	101,700
合計		11,976,272	376,890	11,599,382

地球温暖化対策に関する実施計画の策定

本学では、温室効果ガスの総排出量を、基準年を2007（平成19）年度とし、2012（平成24）年度までに5%削減することを目標とした「国立大学法人北海道教育大学における地球温暖化対策に関する実施計画」を策定し、目標を達成するために努力しています。

環境物品等の調達の推進

本学では、「環境物品等の調達の推進を図るための方針」を策定し、環境物品等の調達の推進を図っています。

また、物品等を納入する事業者、役務の提供事業者、公共工事の請負事業者等に対して、事業者自身が本調達方針に準じたグリーン購入を推進するよう働きかけるとともに、物品の納入に際しては、原則として本調達方針で定められた自動車を利用するよう働きかけています。

テレビ会議システムの利用推進

本学では、キャンパスが遠隔地に分散しているため発生する会議旅費の抑制を図るため、テレビ会議システムの利用を促進しています。

2008年度の全学会議テレビ会議システムの利用率は38.8%（全学会議410回、うちテレビ会議159回）となり、前年度利用率を1.3%アップすることができました。



ホームページによる情報公開

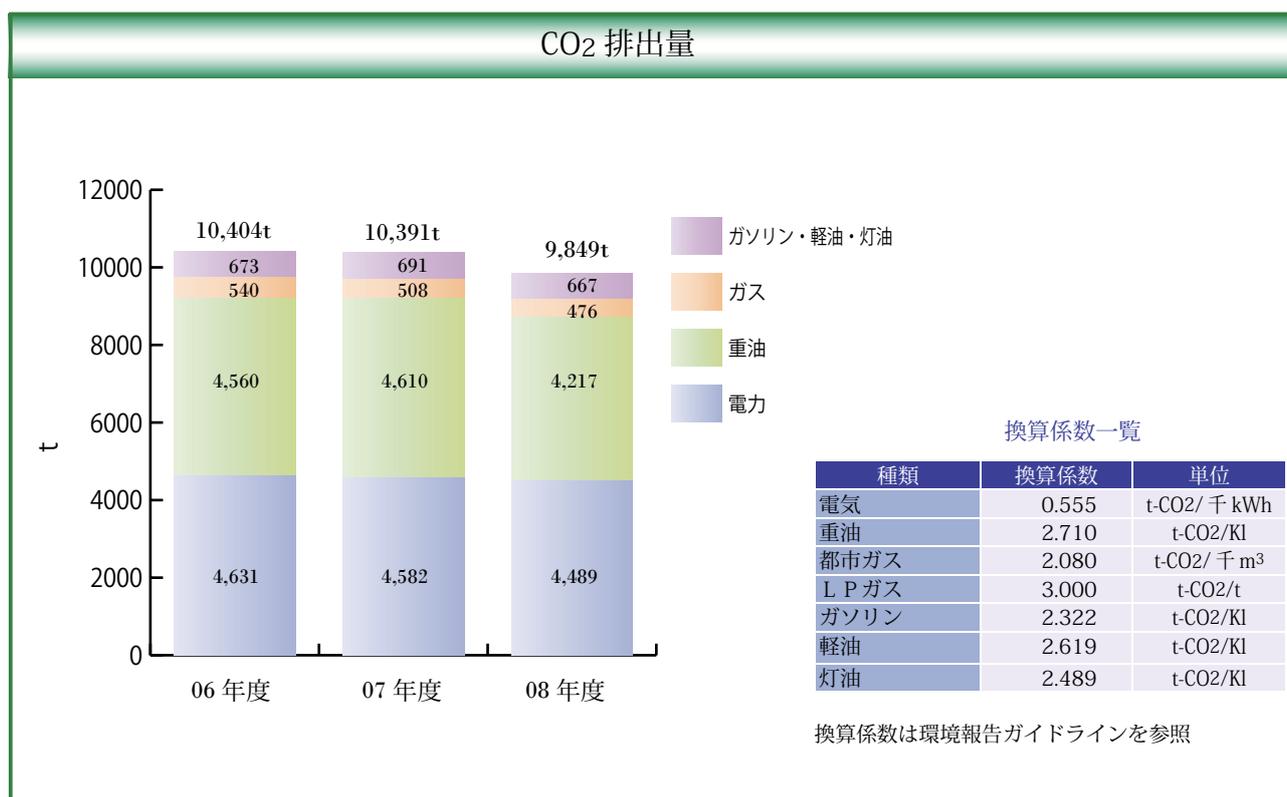
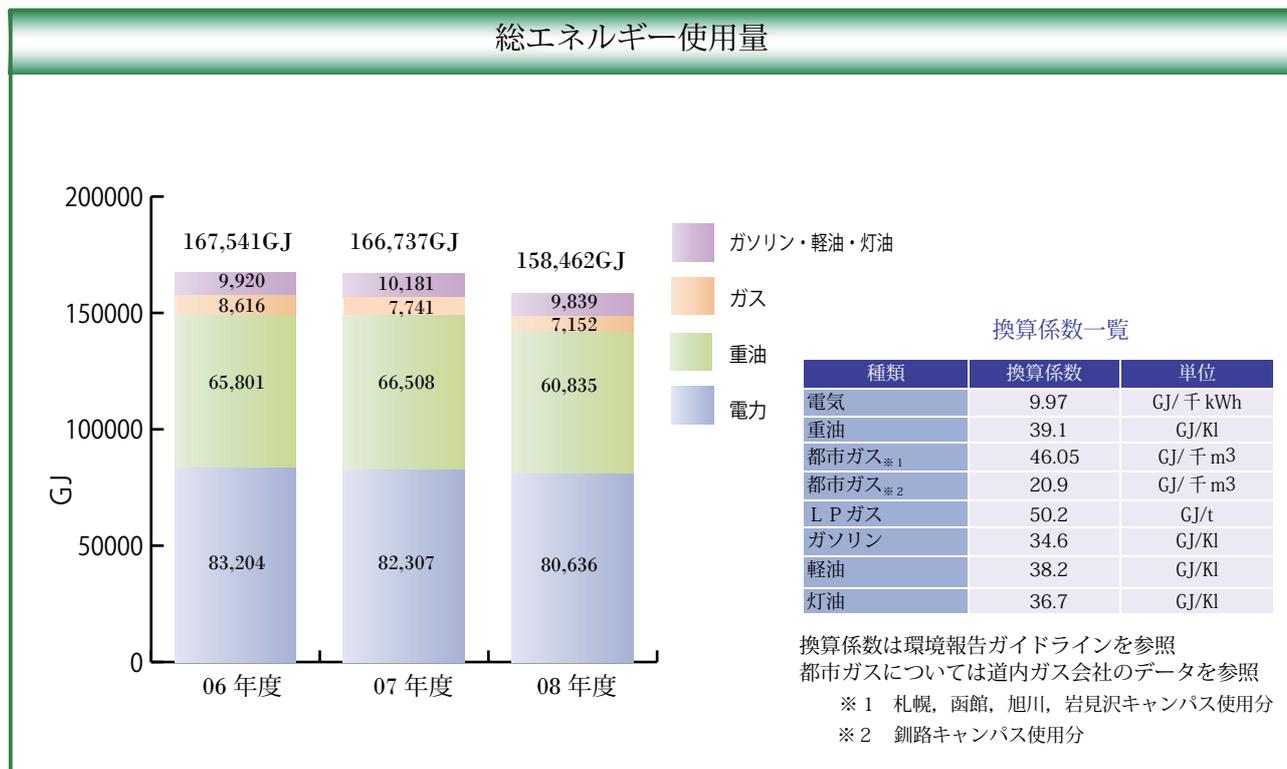
北海道教育大学では、環境報告書をホームページ上で参照できるようにしています。



URL : www.hokkyodai.ac.jp

(1) エネルギーの有効活用と節約の推進

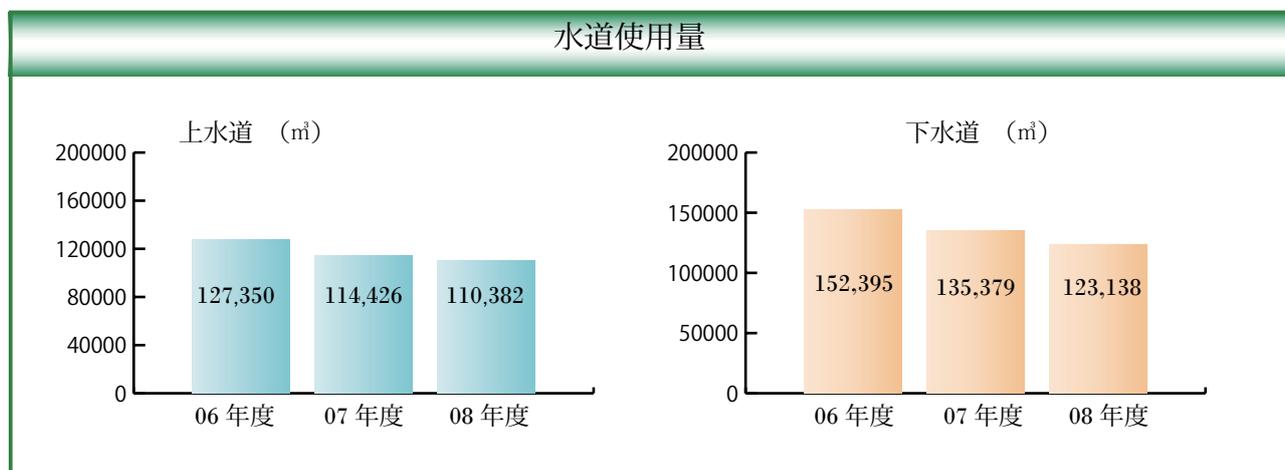
2008年度は、校舎耐震改修時に外壁及び屋上の外断熱工事の実施、高効率トランスへの更新、人感センサー設置による照明設備制御等によりエネルギー使用の効率化を図りました。また、省エネ啓発のポスターの掲示等エネルギーの有効活用を呼びかけたことから、前年度と比較して総エネルギー使用量を約4.9%、CO₂排出量を約5.2%削減することができました。今後とも、さらなる節約を推進していきます。



(2) 水の有効利用の推進

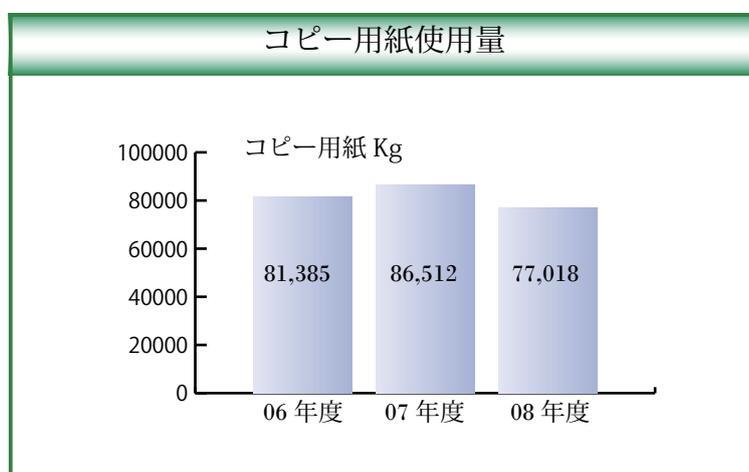
上水量に対して下水量が多いのは、地下水を利用しているキャンパスが2カ所あるためで、実際の使用量は、下水量相当になります。

2008年度は、トイレへの擬音装置設置及び水栓への節水型泡沫キャップの取付け等を行っており、前年度と比較して上水道約3.5%、下水道約9.0%削減しました。今後も、引き続き節水に取り組んでいきます。



(3) 資源の有効利用とリサイクルの推進

資源の有効利用とリサイクルを推進するための新たな取り組みとして、今まで廃棄していたシュレッターくずのリサイクル実施や、リユースリサイクルプロジェクトによる資源の有効利用の実施等を行っています。



■印刷（コピー）用紙の消費

印刷及びコピー時の両面使用及び集約機能（2 in 1）の徹底や、メール会議の活用等を行い、前年度に比較して11%削減することができました。

平成20年度の各キャンパス毎の使用量

	電気 (kWh)	ガス		水道		A重油 (L)	灯油 (L)	コピー用紙 (kg)
		都市ガス (m³)	LPガス (m³)	上水道 (m³)	下水道 (m³)			
札幌キャンパス	2,160,481	25,883	-	20,347	29,030	514,980	1,617	28,081
函館キャンパス	1,838,874	20,645	6,047	35,129	33,653	357,098	21,145	14,140
旭川キャンパス	1,599,986	33,697	114	17,119	23,857	279,800	135,873	16,473
釧路キャンパス	1,502,703	125,844	-	22,092	21,782	204,000	53,013	13,205
岩見沢キャンパス	985,840	3,334	323	15,695	14,816	200,000	34,588	5,119
計	8,087,884	209,403	6,484	110,382	123,138	1,555,878	246,236	77,018

(4) 学内緑化の推進とグリーン購入の徹底

本学では僅かであっても、CO₂削減につながるよう、キャンパスの緑地を保全し、緑化を推進しています。

備品・消耗品の購入に当たっては、グリーン購入対象物品等の購入目標に対して100%の購入を実現しています。引き続き100%購入に努めます。

■ 学内緑化推進

平成20年5月22日(木)、札幌キャンパスにおいて、構内環境美化推進の一環として、正面駐車場脇の花壇にベコニア120本を植花しました。

当日は、晴天に恵まれ、本間謙二学長をはじめ、事務局職員ら約20名が参加し、心地よい汗を流しました。

植花にあたり、本間学長ら職員は、スコップなどを使い、手作業で根の深い雑草を除去し植花の土台となる土を耕しました。

その後、ベコニア1本1本をきれいに耕された土に愛情を込めて植花し、朱色やピンク色の可愛い花が構内に彩りを加えました。



■ キャンパスクリーン作戦の実施

本学では、「キャンパスクリーン作戦」と銘打って敷地内の清掃活動を実施しています。

この取り組みは、エコキャンパスの実現を目的とする本学の環境保全推進本部が策定した環境保全計画に基づき、毎年実施しているもので、全キャンパスの学生及び教職員が一丸となって取り組んでいます。



札幌キャンパス



函館キャンパス



旭川キャンパス



釧路キャンパス



岩見沢キャンパス

環境汚染物質の管理と排出等について

① 上下水の検査と管理の現状

本学では、各キャンパスが所在する都市の条例等に従い、毎年定期的に水質検査を行っています。平成20年度は検査の結果、すべて適合していました。

	区分	検査と管理の現状			
		対象	測定内容	検査時期	検査結果
札幌校	上水道	中央機械室給水設備	検査等	週1回	異常なし
			水道検査	年1回	適合
		講義棟・札幌校研究棟飲料水	水質検査	週1回	適合
		中央機械室給湯水	水質検査	週1回	適合
		中央機械室雑用水	水質検査	週1回	適合
		管理棟飲料水及中央機械室給湯水	水質検査	年2回	適合
	北光寮（女子寮）飲料水	水質検査	年1回	適合	
下水道	研究棟系統 福利施設系統講義棟	水質検査	月1回 年2回	適合	
函館校	上水道	ボイラー室 附属函館中学校 附属特別支援学校 男子寮 女子寮	水質検査	年1回	適合
		下水道	2号館系	水質検査	年2回
		8号館系	水質検査	年2回	適合
		厚生会館系	水質検査	年2回	適合
旭川校	上水道	給水施設	検査等	毎日	異常なし
		教育棟ポンプ室・附属学校ポンプ室 貯水槽	水質検査	年1回	適合
		給水施設・福利厚生施設	水質検査	毎日	適合
		給水施設（浄水）	水質検査	月1回 年1回 年4回	適合
	下水道	最終放流口	水質検査	年2回	適合
釧路校	上水道	釧路校・附属釧路学校・鶴ヶ岱寮（学生寮）飲料水	水質検査	年2回	適合
岩見沢校	上水道	ボイラー室・希望寮（男子寮）・清明寮（女子寮）	水質検査	年1回 年2回	適合

② 有害化学物質の適正管理と廃棄の現状

本学では、有害化学物質の適正管理に努めています。

各種化学薬品類

	有害物質名称	保管の状況				処理等	管理記録	特別管理産業廃棄物 管理責任者の選任
		容器の 形状	分類	分別 ・ 混在	屋外 ・ 屋内			
札幌校	廃液	専用容器	廃酸	分別	屋内	2009年2月 業者処理	実験廃液処理 依頼伝票	財務部経理課総括主査 講習修了者
函館校	廃試薬・廃液等	専用容器	無機系・有機系・ 廃油・写真廃液	分別	屋内	2008年3月 業者処理	実験廃液処理 依頼伝票	財務グループ専門職 講習修了者
旭川校	廃試薬・廃液等	専用容器	クロム・水銀・ シアン・その他	分別	屋内	2007年12月 業者処理	実験廃液処理 依頼伝票	教授 講習修了者
釧路校	廃試薬・廃液等	専用容器	クロム・水銀・ シアン・その他	分別	屋内	2008年3月 業者処理	実験廃液処理 依頼伝票	財務グループ専門職 講習修了者
岩見沢校	廃試薬・廃液等	専用容器	無機系・有機系	分別	屋内	2009年3月 業者処理	実験廃液処理 依頼伝票	各研究室使用責任者

環境汚染物質の管理と排出等について

ポリ塩化ビフェニル廃棄物（PCB）

	有害物質名称	保管の状況				処理等	管理記録	特別管理産業廃棄物 管理責任者の選任
		容器の形 状	囲い(掲示) の有無	分別 混在	屋外 屋内			
札幌校	PCB 使用蛍光灯 安定器	プラスチック 容器	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	未定	PCB 管理台帳	財務部施設課専門職 講習修了者
函館校	PCB 使用蛍光灯 安定器	蓋付プラス チックケース	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	未定	PCB 使用電気 機器管理台帳	財務グループ専門職 講習修了者
	PCB 使用コンデ ンサー	蓋付プラス チックケース	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	早期処分 登録済		
旭川校	PCB 使用蛍光灯 安定器	樹脂 BOX	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	未定	引渡保管物 一覧表	教授 講習修了者
	PCB 使用コンデ ンサー	樹脂 BOX	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	早期処分 登録済		
釧路校	PCB 使用蛍光灯 安定器	蓋付プラス チックケース	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	未定	PCB 使用電気 機器管理台帳	財務グループ主査 講習修了者
	PCB 使用コンデ ンサー	蓋付プラス チックケース	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	早期処分 登録済		
岩見沢校	PCB 使用蛍光灯 安定器	プラスチック 容器	囲い 有 掲示 有	分別	屋内	未定	保管管理状況 自主点検報告	総括主査 講習修了者

※ 各校はポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法の規定に基づき届け出を行っています。

現在使用中である一部の電気室トランスは成分未分析のため低濃度 PCB としての取り扱いをしています。

③ 有害物質取扱作業場所における作業環境測定

本学では、労働安全衛生法に従い、有害物質取扱作業場所において作業環境を測定しています。平成20年度は測定の結果、適切な作業環境を保持していました。

	対象場所	測定調査の時期	測定調査の結果
札幌校	化学物質を使用している場所	平成20年10月	適切
函館校		使用量が少ないため、測定の必要なし	—
旭川校		使用量が少ないため、測定の必要なし	—
釧路校		使用量が少ないため、測定の必要なし	—
岩見沢校		使用量が少ないため、測定の必要なし	—

④ 分煙対策

平成 15 年 5 月に「健康増進法」が施行され、受動喫煙の防止に努めることが学校や企業に求められておりますが、本学においては、受動喫煙防止だけでなく、未成年者の喫煙防止や喫煙者自身の健康被害防止等の観点から、平成 20 年 4 月より、大学敷地内では学生・職員・学外者を問わず全面禁煙といたしました。

また、保健管理センターでは、「無煙化 5 ヶ年計画」に基づき禁煙支援を行っています。

⑤ 一般固形廃棄物の管理と排出状況

本学では、下記のとおり廃棄物を分別し、処理業者に委託し、処理しています。

	固形廃棄物分別区分	廃棄量 (単位)	処分方法
札幌校	燃えるゴミ	57,970 kg	廃棄物処理業者に委託
	燃えないゴミ	—	
	資源ゴミ	33,582 kg	
	粗大ゴミ	4,185 kg	
函館校	燃えるゴミ	964 m ³	廃棄物処理業者に委託
	燃えないゴミ	1,045 m ³	
	資源ゴミ	259 m ³	
	粗大ゴミ	—	
旭川校	燃えるゴミ	309 m ³	廃棄物処理業者に委託
	燃えないゴミ	252 m ³	
	資源ゴミ	23 m ³	
	粗大ゴミ	6,870 kg	
	粗大ゴミ (実験台他)	17 台	
釧路校	燃えるゴミ	36,590 kg	廃棄物処理業者に委託
	燃えないゴミ	—	
	資源ゴミ	10,240 kg	
	粗大ゴミ	9,729 kg	
	粗大ゴミ (OA 機器類他)	530 台	
岩見沢校	燃えるゴミ	111 m ³	廃棄物処理業者に委託
	燃えないゴミ	150 m ³	
	資源ゴミ	10 m ³	
	粗大ゴミ	160 m ³	



リサイクル資源の回収BOX



視覚を活用した、分別収集カート

(1) 学部における環境科目関連の開設状況

各キャンパスにおける平成20年度の主な環境関連科目の内容を表に示しました（下記の表）。

	科目名	担当者	講義内容
札幌校	環境マネジメント	並川 寛司	地球温暖化をはじめとする地球規模の環境問題の解決には、市民一人一人の日常的な省資源・省エネルギーへの取り組みが不可欠である。しかし、このような活動を、学校や社会の中で組織的あるいは系統的に実践していくこと、つまり環境マネジメントを行うには、基礎的な知識と実践経験が必要である。この講義では、受講者に、将来小・中学校の教員となった際、学校での環境マネジメントに寄与できるような知識を教授し、その知識をもとに環境の見直し、その改善を実行できるような資質を育むことを目的とする。
	環境と物理学	油川 英明	自然環境の仕組みを物理学の視点から解説する。内容としては、先ず、これまでの環境破壊に関わる具体的な事例を取り上げ、自然法則に照らして考えてみる。次に、自然環境に関係の深い物理学の基本的な法則について述べ、さらに、地域環境に関わる事象としての雪氷を取り上げ、その物理学的諸現象について解説する。
	環境倫理学	岩井 洋	環境問題の源は、産業革命の社会的完成にともなう「人間中心主義」に向かう人の心である。この講義は、近現代の時代思潮の中に無意識なまでに深化した「人間中心主義」の意識を歴史的に検証するとともに、「人間非中心主義」としての自然・動物との共生意識構築への試みを紹介するものである。
	環境科学実験Ⅰ	岡村 聡	授業の目的は、環境に関わる自然現象を具体的・実証的に把握し、自然の仕組みの緻密さを理解することにより、環境教育の教材開発を行うための資質を育成することにある。観察・実験の対象として地学的分野を取り上げる。また、観察・実験の方法や器材の操作など、環境教育のための基礎的素養を修得することも目的のひとつとする。
	生活環境物質と環境	森田みゆき	生活に関わる化学物質を利用と環境という側面から解説する。また、受講生自らがテーマを設定し身の回りの化学物質の現状を調査分析し発表を行うことで、資料をもとにより深く分析し、プレゼンテーション能力の育成を行う。
函館校	環境法・政策学	浅木 洋祐	地球温暖化や、生物多様性の破壊、砂漠化など、多様化・深刻化する環境問題に対して、環境税、排出権取引、直接規制など、さまざまな環境政策が検討・実施されている。本講義では、これらの環境政策の理論的基礎と、豊富な事例を取り上げながら実際の政策について学んでいく。本講義を通して、環境政策の理論的枠組みの正確な理解と、環境政策の現状と課題についての知識の習得を目指す。
	環境緑化論	川本 清美	人間にとって快適な生活環境を整備するために環境緑化は有用であり、古くから公園整備など様々な形で行われてきた。前半は、都市緑地を確保するための制度、事業手法について学ぶ。後半は、環境緑化の機能と技術について学ぶ。最後に緑地整備の実態として、日本および海外の事例を取り上げる。

	科目名	担当者	講義内容
	現代の地球・宇宙科学	紀藤 典夫 鷹澤 好博	地球の基本的な概念・知識についての理解を深めることを目標としている。前半では、現在の環境問題を中心に、それらに関連する地球環境の変化の歴史を概観する。また、最近の気候の変化について調べ、その内容を発表する。後半の授業では、地球科学の基礎的な内容を理解するとともに、現在の我々が生きている地質時代「第四紀」の特徴や自然環境の変化について学ぶ。
	廃棄物処理とリサイクル	尾崎 文彦 門上 洋一	人間は生きていくために生産し、消費することによって廃棄物を生じさせている。循環型社会を目指すためには、資源の有効利用は必須である。この講義では、廃棄物処理の歴史とともにリサイクルの現状を把握し、資源の有効利用のために次世代型の付加価値の高い循環型社会を目指す。
旭川校	現代と社会	角 一典 海老名 尚 千葉 胤久	本講義は環境をキーワードとして、以下の3つの観点から検討を試みるものである。 1) 環境社会学の研究成果をもとに、近代化以降の日本の環境問題から今日に至る地球環境問題までの歴史的流れを把握する。(角) 2) 環境倫理思想の系譜を概観し、現代の代表的な環境思想・立場に関する理解を深め、環境(自然)と人間との関係のあり方について考察していきたい。(千葉) 3) 環境という切り込み口で、日本の歴史を繙くと、どのようなことが見えてくるか。また、そこから現代社会に生きるわれわれは、何を学ぶべきか、考えてみたい。(海老名)
	環境物理学2	小黒 貢	雪氷物理学の視点にたって現在の環境問題をとらえる。 以下の三点について理解することを目指す。 1. 氷や雪の構造からその物理・化学的性質を知る。 2. いくつかの身近な雪氷の自然現象を知る。 3. 雪氷が地球規模の環境問題に深く関わっていることを理解する。
釧路校	環境教育持論	大森 享	小学校環境教育実践についてその原理を学ぶ。子ども観、指導観、環境教育創造の視点、教育手法、小学校環境教育実践をめぐる動向など、実践するに当たっての原理的考えや教育手法について論じる。院生はあらかじめ指定された文献を購読しレポート報告を行う。
	道東自然環境論	神田 房行	釧路湿原を中心として北海道東部の湿原に生育する植物、生息する動物など、野生生物についての解説をおこなう。また、道東から北海道、日本、世界と広げて、湿原と野生生物についての解説をおこなう。 また、湿原を中心とした自然環境の保全や野生生物の保護について、法的な側面やラムサール条約など国際条約についても言及する。これらのことを通して自然環境の多様性の保全や、野生生物の保護について考える。
	地域ボランティアA	高橋 忠一	地域におけるボランティア活動にはさまざまなものがあるが、今回はまだ比較的一般化していない、森林環境ボランティアを通じて道東の自然が直面している問題を検証する。
	環境リテラシー	生方 秀紀 大森 享	地域や世界規模の環境問題の解決に貢献できるような環境教育を進めていくためには、「環境とは何か」「環境問題とは」「環境問題の原因」についての知識を整理し、構造化し、さらに「環境と人間との関係」への深い考察を試みる事が不可欠である。このような試みを行い、意思決定に生かしていく知的能力の事「環境リテラシー」と定義する。この講義を通して、学生が環境リテラシーを身につけ、それを自ら磨き上げていくための方法に慣れることが期待される。

	科目名	担当者	講義内容
	人間環境演習 1	長澤 徹	現在の企業は、排気ガス、排水などの環境問題をクリアしないと企業として成立しないことになり、環境問題に投資する金額は、年々増加している。このような現状を把握するために、実際の企業を訪問し、講演を聞いたり、実際の設備などを見学する。企業のあり方を調べ、レポートにまとめる。演習形態とし、この演習を通して、学生に紙の製作過程を理解させると共に紙のリサイクルの概念を植え付けることを目的とする。
岩見沢校	野外環境教育論	前田 和司	日本において野外教育と環境教育は別々のものとして考えられる傾向がある。しかし、国際的な流れとして、これら二つを野外環境教育として統合していこうという動きが活発になってきた。それは、実際の自然環境の中での教育活動を通して、社会と自然の関係を見直し、それを良好なものにしていく必要性が共通認識となってきたからである。本講義では、こうした国際的傾向に沿いながら、実際の地域に即した野外環境教育のあり方を探っていく。
	自然を楽しく学ぶプログラム	能條 歩	プロジェクト WILD, Project Learning Tree, ネイチャーゲームなど、自然体験学習や環境教育に関するパッケージドプログラムの体験学習を通して、自然を楽しく学ぶ方法論について学ぶ。

■ 三笠市の旧小学校を教育施設として再利用

本学は、旧三笠市立幌内小学校校舎、運動場等を活用し、教育研究並びに学生の諸活動に有効利用することを目的に、当該校舎等を無償で借り受ける契約を締結し、平成20年10月28日（火）、三笠市との調印式を実施しました。

今後は、当施設を活動拠点として、三笠市近郊地域の自然を生かした環境教育や自然体験活動プログラム及び芸術に関わるプログラムの開発に関する研究並びに地域に根ざした芸術・スポーツ文化の開発に関わる研究、市民の健康増進のための体力づくりやスポーツ及び地域文化の活性化に関わる研究等を展開することを目標としています。

また、当施設は、宿泊場所を完備した学内の共同利用施設として、本学全学における様々な活動に利用できるよう施設整備を行いました。

本学は、平成17年5月に三笠市と相互協力協定を締結し、教育・文化・芸術・スポーツの分野で相互に協力していくこととしており、これを契機に、三笠市関係者からは、本学の地域貢献に対し、さらに熱い期待が寄せられています。



幌内自然体験学習研究施設
【通称 i-HOLONE】(旧 幌内小学校)



幌内自然体験学習研究施設グラウンド

■ 本学教員が09年度科学技術分野の文部科学省大臣表彰・科学技術賞を受賞しました。

科学技術に関する研究開発，理解増進等において顕著な功績をあげた者に授与される科学技術分野の文部科学大臣表彰・科学技術賞に，本学から1名が選ばれ，4月14日に授賞式が虎ノ門パストラルで行われました。

詳細は以下のとおりです。

<受賞名>

文部科学大臣表彰・科学技術賞（理解増進部門）

<業績名>

科学リテラシー育成に向けての大気科学に関する理解増進

<受賞者>

高橋庸哉（札幌校教授）

<業績内容>

地球温暖化問題などにより，大気をグローバルな生活環境として，いやが上にも意識せざるを得なくなっている。また，情報関連技術の急速な進歩に伴い，気象情報が高度・多様化した。大気科学の学習は現代人のリテラシーとして不可欠であるが，学校教育現場で十分な取扱い・活用がなされていない。

本活動は，児童・生徒の科学的興味を高め，日常生活と密接した大気科学に関する理解の増進を意図する。身近な気象情報の原理・読み方や実社会との関わり等の理解を図る中高生向け体験学習プログラムを開発し，サイエンスキャンプ等で実践した。

次に，その成果を教育現場へ広く普及させるべく，教員研修プログラムを開発し，ワークショップを実施した。‘授業で使える’ことに力点を置き，主対象を理科専門外の小学校教員や気象学未履修の中学校理科教員とし，全体のレベルアップを図った。本活動により，参加小学校教員の7割が年度内に研修内容を利用して，児童の理解を改善し，提供教材を利用した授業を受けた中学生は1回のワークショップで延べ約8千名に達するなど，参加者から多くの児童・生徒，同僚へと研修内容が波及し，学校教育現場における授業内容改善に寄与している。



ワークショップ風景



ワークショップ風景



文部科学大臣表彰・科学技術賞表彰盾

環境教育活動の取り組み

(2) 附属学校・園における環境教育

【附属小・中学校における環境教育の取り組み状況】

	テーマ	学年	教科	時間数	大学との連携
附属札幌 小学校	「いのち」をそだてよう アサガオ	1	生活	10/102	
	茨戸川のしぜん 手作り水族館をつくろう	2	生活	10/102	
	雪を知ろう なかよくなるろう	2	生活	2/102	
	タンポポのひみつ 環境への適応	3	総合	10/105	
	あいの里緑道探検隊 地域の自然	3	総合	15/105	
	ゴミはどこへ ゴミステーションを守る地域の人々	4	社会	10/79	
	水はどこからどこへ	4	社会	15/79	
	日本の「名水」しらべ	4	総合	15/105	
	生きている土	4	総合	4/105	学生の授業
	メダカをもとにした生命の学習	5	総合	8/105	指導案検討 学生の授業
	生き物と環境 食物連鎖	6	理科	12/95	
マイクロワールド	6	総合	4/105	研究室での実験	
附属札幌 中学校	3年総合的な学習の時間「ブルーム」は人間関係形成能力や情報活用能力を育み、社会における課題について考え判断していく学習活動において、一人一人の課題の中に環境問題をテーマとして捉えている生徒がいる。例) 川の水質保全について、札幌市におけるゴミ問題、札幌市の都市環境の問題等	3	総合	70/105	
	科学技術と人間「自然放射線を確かめるにはどうすればよいか」等全市へ授業公開	3	理科	4	
	「水資源から見た日本と世界」等全市へ授業公開	1	社会	3	
※ 平成21年度より、平成20年度の取り組みを発展させ、(財)日本生産性本部・エネルギー環境教育情報センターの「エネルギー教育実践パイロット校」として「エネルギー環境マイシートを用い教科横断的な授業(社会、理科、技術・家庭、道徳)の実践」の研究委託を受け実践校として3年間取り組む。また、21年11月、北海道エネルギー環境教育研究会北海道大会で社会科の授業公開を予定。					
附属函館小 学校	"健康なくらしとまちづくり(水はどこからごみはどこへ)"	4	社会	20/85	
	"函館探検隊～町のためにできること(ゴミ拾い、緑化運動、花いっぱい運動等のお手伝い)"	3	総合	10/105	
	生物とかんきょう	6	理科	6/95	
附属函館中 学校	「環境」のテーマのもと、各自で課題を設定し、資料収集、調査等を行い、論文作成及び意見発表を行う	1	総合	40/100	
附属旭川 小学校	「旭川にはどんな川が」川治いを見学し、環境問題提起、調べ活動後、河川環境保全のボランティアとして地域の方と川治いを清掃する	3	総合	18	
	「ぼくもわたしもエコ博士」省エネやリサイクル等について調べ、自分にもできるエコロジー活動を考え実践してみる	4	総合	12	
	「くらしの中の水とゴミ」浄水場、最終処分場、ゴミ焼却施設の見学、水とゴミに関わる調べ学習、水・ゴミを減量する作戦として省エネ分別の実践	4	社会	20	

	テーマ	学年	教科	時間数	大学との連携
附属旭川中学校	附中校地の大気の汚れを比較する	3	理科	3	
附属釧路小学校	みのりプロジェクト～体験活動を重視した環境教育プログラムの開発～	全学年	全教科	主な体験活動の総時間数として60時間	共同研究プロジェクト

■ 「環境教育パネル展」を開催

「環境教育パネル展」を、本学の各附属小・中学校で開催される研究大会の場を借りて開催しました。このパネル展では、大学での環境教育の例、研究あるいは研究室紹介、小・中学校での実践例、学内での環境保全活動などに関するポスターを掲示し、広く道内の小・中学校の先生方に本学での環境教育あるいは環境研究に係る情報を発信することができ、大学と連携した環境教育実践への取り組みへの契機となることが期待されます。



■ 附属釧路小学校環境教育 みのりプロジェクト～体験活動を重視した環境教育プログラムの開発

本校で取り組んだ本プロジェクトでは、地域の身近な環境や素材へのかかわりを通して、特に釧路湿原の保全・再生の問題意識の醸成や生涯にわたって自然を大切に生きていく人材を育成することを目的に以下のことに取り組みました。

- 1) 本校の教育課程における環境教育の位置付けを明確にするとともに、環境教育の全体計画を立案。
- 2) 学年ごとに地域の環境・素材に直接触れ、かかわる体験活動を重視した環境教育を中心に据えた教科融合型の年間指導計画を作成した。
- 3) 全体計画・各学年の年間指導計画を基にし、地域や保護者との連携を図り、身近な自然環境に直接触れることができる教育活動を展開した。
- 4) 実践した環境教育の一部を集約・整理した。
- 5) 上記の4項目を研究集録として集約した。



(4) 地域貢献（社会貢献）

本学には、様々な専門分野の教員がおり、その研究活動は多岐にわたり、各種審議会委員や講演会の講師、地域の環境活動等を積極的に行っています。これら教員の研究活動から、環境保全及び環境教育に関わる教員の社会貢献の実態を示します。

【本学教員が委嘱を受けている各種審議会などの一覧】

■ 各種審議会委員

	教員名	職名	名称（具体的な内容等、参考となる事項）	委嘱機関	期 間
札幌校	大 津 和 子	教授	北海道環境審議会委員	北海道	20.10.7 ~ 22.9.30
			財団法人理事	財団法人北海道環境財団	19.6.1 ~ 21.5.31
	城 後 豊	教授	環境教育リーダー研修基礎講座検討会委員	北海道地方環境事務所	20.4.18 ~ 20.11.30
	住 田 和 子	教授	農地・水・環境保全向上対策検討委員会委員	北海道	19.11.12 ~ 22.3.31
	森 田 みゆき	教授	札幌市環境教育基本方針推進委員会委員	札幌市環境局	19.12.18 ~ 20.12.17
			札幌市環境審議会委員	札幌市	21.3.26 ~ 23.3.25
尾 関 俊 浩	准教授	岩見沢市雪冷熱利用事業評価委員会委員	岩見沢市	20.6.2 ~ 21.3.31	
		「雪氷災害調査チーム」緊急出動メンバー	(社)日本雪氷学会北海道支部	20.12.22 ~ 21.3.31	
函館校	長 谷 昭	教授	函館市環境審議委員会委員 (環境の保全及び創造に関する基本的事項を調査審議する委員会)	函館市環境部	17.12.1 ~ 21.11.30
			「函館市緑のパートナー会議」委員 (「函館市緑の基本計画」推進にあたり、意見及び提言を行う会議)	函館市土木部	18.6.1 ~ 22.5.31
			函館市緑化審議委員会委員 (緑化の基本計画、その他推進に関する事項を審議する委員会)	函館市土木部	18.12.24 ~ 20.12.23 21.2.2 ~ 23.2.1
旭川校	芝 木 邦 也	教授	旭川市を緑にする会副会長 (育樹事業などのボランティア活動による緑化の推進、緑の啓発活動を行う)	旭川市	19.6.7 ~ 21.5.31
	西 川 恒 彦	教授	希少野生動植物指定候補種検討委員会委員 (北海道に生息・生育する希少な野生動植物の保護対策の推進を図る)	北海道環境生活部	20.5.1 ~ 21.3.31
			自然環境保全基礎調査植生調査ブロック調査会議委員 (植生の現況を正確に把握し、自然環境保全施策を進める)	環境省自然環境局植生多様性センター	20.10.9 ~ 21.3.31
	角 一 典	准教授	旭川市ごみ減量等推進優良事業所認定審査会委員（事業系ごみの減量とリサイクルを推進する）	旭川市	21.1.23
	川 邊 淳 子	准教授	旭川市廃棄物減量等推進審議会委員 (旭川市の一般廃棄物の減量化を推進するための審議)	旭川市	21.3.15 ~ 23.3.14
	藤 山 直 之	准教授	旭川市環境審議会委員 (旭川市の環境の保全、創造に関する基本的事項を調査審議)	旭川市	20.11.20 ~ 22.11.19

	教員名	職名	名称（具体的な内容等，参考となる事項）	委嘱機関	期 間
釧路校	神 田 房 行	教授	釧路市環境審議会委員	釧路市環境部	19.12.8 ~ 21.12.7
	酒 井 多加志	教授	釧路市都市計画審議会委員	釧路市都市計画課	19.5.24 ~ 21.5.23
岩見沢校	蠣 崎 悌 司	教授	岩見沢市公害対策審議会委員	岩見沢市	19.10.1 ~ 21.9.30
	能 條 歩	准教授	岩見沢市公害対策審議会委員	岩見沢市	19.10.1 ~ 21.9.30

■ 講演会の講師

	教員名	職名	名称（具体的な内容等，参考となる事項）	委嘱機関	期 間
函館校	田 中 邦 明	教授	平成20年度初任者研修「地域研修（環境保全）」講師	函館市北海道教育センター	20.6.26
			環境タウンミーティング北海道発地球温暖化STOP！私たちにできること 講師	生活協同組合コープさっぽろ	20.6.27
			北海道自然保護協会研修会講師（演題）「渡島大沼水質改善プロジェクト」－美しい大沼を教育の力で取り戻そう－	北海道自然保護協会	20.12.6
	松 浦 俊 彦	准教授	平成20年度1学年「エネルギー環境」教育講師	北海道知内高等学校	20.11.25

■ 他大学等の非常勤講師

	教員名	職名	科目名（具体的な内容等，参考となる事項）	委嘱機関	期 間
札幌校	佐々木 胤 則	教授	環境保健	吉田学園専門学校北海道保健看護大学校	20.4.1 ~ 20.9.30 20.10.1 ~ 21.3.31
	尾 関 俊 浩	准教授	環境共生科学演習	新潟大学大学院自然科学研究科	20.6.1 ~ 21.3.31
函館校	山 本 道 隆	准教授	公衆衛生学	函館短期大学付設調理師専門学校	20.4.1 ~ 21.3.31

■ 地域の環境活動及び啓発活動

	教員名	職名	名称（具体的な内容等，参考となる事項）	実施場所	期 間
函館校	畑 明 郎	特任教授	特別講演「土壌汚染対策法施行5年，土壌汚染の現状と問題点」	函館校	20.10.6
	石 城 謙 吉	特任教授	公開特別講座「森林と人間」	函館校	21.2.10
岩見沢校	能 條 歩	准教授	第3回北海道自然体験活動推進協議会(CONE) ミーティング	国立大雪青少年交流の家	20.11.17 ~ 20.11.18

■ ワークショップ「授業で使える！身近な天気情報と空気のワクワク実験」

中学校理科教員を対象に、夏休みワークショップ「授業で使える！身近な天気情報と空気のワクワク実験」を開催しました。このワークショップでは、テレビ・新聞などを通して、最も身近な気象衛星画像やインターネットから得られる様々な気象情報、天気予報の仕組みや利用の仕方などを様々な実習を通して学び、簡単にできる楽しい実験を紹介しました。



宇宙から雲を見よう！実習風景

■ フレンドシップ事業「こどもキャンプ」

こどもキャンプは、岩見沢市のこどもたちを対象に、「豊かな自然体験」「キャンプで考える自然環境」などをテーマに、2002年から実施しています。このキャンプは、学生が企画から運営までの全てを担当しています。

3日間という短い期間ではありますが、保護者とも学校の先生とも違う“若い大人”と過ごす楽しいひとときは、普段とちょっと違うステキな時間のようで、毎年定員を大きく超える申し込みをいただいて、うれしい悲鳴を上げている状態です。昨年からは、財政破綻によって著しく青少年教育事業が削減されてしまった夕張市のこどもたちにも声をかけての実施となりました。



幾春別川プロジェクトの実施

●連携機関等：北海道開発局石狩川開発建設部岩見沢河川事務所、北海道河川防災研究センター、幾春別川を良くする市民の会 ●開催日：2008年8月1日（金）●開催場所：幾春別川河川敷 他

岩見沢市内を流れる幾春別川。市民の憩いの場として様々な工夫を凝らしているにもかかわらず利用者が少ない現状を踏まえ、岩見沢校の学生たちが今後の利用に対するアイデアを考え、画像、模型などを作成してプレゼンテーションを行いました。



プロジェクト紹介

雪から広がるさまざまな学びのサポート～北海道雪プロジェクトの取り組み 2008

雪は地域の特色を活かした格好の教育素材である。そこで、教育の場で役立つ情報を提供する「北海道雪たんけん館」(<http://yukipro.sap.hokkyodai.ac.jp>)を開発し、それを核として、雪の学習の推進・普及を図る活動を2000年から進めてきた。その活動を担っているのが「北海道雪プロジェクト」(雪プロ)で、本学を核に教育現場の多くの先生や学芸員、行政担当者に参加頂いている。2008年度に行った取り組みは以下の通りです。

1. 新コンテンツ「雪に負けない世界一の新千歳空港」開発： 北海道の交通の要で、羽田との単一路線としては世界一利用者が多い新千歳空港の雪対策を取り上げた。滑走路の除雪と雪の中での航空機の運航に焦点を当てた。構想から3年を費やし、制作にあたっては、全日空、国交省千歳空港事務所に多大なるご協力を頂いた。

2. 児童向けワークシート・教師向け実践プランの開発： 多くの教師が授業に容易に取り組めるように、ワークシートを開発し、実践を進めている。5作目として、「身近の除雪について考えよう」(小学校4～6年生用)を制作した。除雪の色々や除雪作業の苦勞、自分たちにもできることを考える。小学校教師用「雪の学習プラン集 Vol. 1」も制作した。10テーマについて、単元のねらい及び単元の評価基準、単元計画、本時の展開例を示した。

3. 札幌市内小学校と共同で第7回雪の学習研究会開催： 雪の学習を全道の教育現場で展開していくために、星置東小で1月30日に実施した。公開授業「雪国“札幌”に生きる2009」や提案「完成！雪の学習カリキュラム集」など。教員を中心に、全道各地から134名の参加を頂いた。参加者の感想例：「雪国に生きる子供たちが自分たちの住む街の良さを再認識し、その魅力を学んでいく学習過程が明確になっていて(かつ指導される先生の思いも)良かったです。」「期待以上に得るものが多く、参加して良かったです。授業や実践のヒントをたくさん頂きました。」「雪プロジェクトの実践・活動は素晴らしいと思いました。Webページや実践資料を元に輪を広げてください。活用可能な内容は使わせて頂きます。がんばってください。また、参加したいと思います。」。また、第4回夏こそ雪プロセミナーも7月に実施した。

4. その他： ①福音館書店「みつけよう かがく」絵本シリーズで「あっ！ゆきだ」を翻訳出版(10月)、②雪プロ事務局次長・割石隆浩先生(札幌市立新琴似緑小)の実践「雪の結晶、どんな形」が朝日新聞「花まる先生」コーナー掲載(全国版1月17日夕刊)、③雪プロ事務局次長・小笠原啓之先生(札幌市立星置東小教諭、現手稲山口小教頭)が「札幌市教育実践功績表彰」を受賞(2月)。

2009年度から重点的に共通に取り組む「札幌らしい特色ある学校教育」の3テーマの一つとして、札幌市が「北国札幌らしさを学ぶ【雪】」を位置づけた。「札幌市小学校教育課程編制の手引き」では冬の天気や除雪、冬の遊び、外国語活動などで「北海道雪たんけん館」を使った指導展開例が示されている。雪の学習をさらに深化、普及させ、教育の場に「役立つ」活動を推進していく予定です。



第7回雪の学習研究会・公開授業「雪国“札幌”に生きる2009」の様子
(札幌市立星置東小学校)

■ エコチャリ・プロジェクト

— 釧路校 チャレンジプロジェクト —

環境問題について世界が危機感を感じている今、それに伴い「持続可能な開発」という理念が生まれました。環境教育について学習している学生たちが地域環境にとって何か持続可能な取り組みを始めることを目的として、今年度北海道教育大学釧路校で「エコチャリ・プロジェクト」を開始しました。学内にある放置自転車の回収・修理・貸し出しを通して、学生に対して自転車が資源であり、環境に配慮した乗り物であることのPRを行いました。具体的には、近隣にあるサイクルショップと連携して、学内に約100台あった放置自転車の修理・整備を行い、修理された自転車は来年度入学する新生に向けて貸し出しを行う予定です。さらに、サイクリング・マップに環境的視点からアプローチを加えたエコチャリ・マップを作成し、「釧路市の新たな観光方法として自転車を取り入れてみてはどうか」という考えのもと、地域経済や観光の活性化を視野に入れながら、活動を発展させてきました。今回のマップでは、「持続可能性」という言葉を念頭に“外来種”“開発”“平和”の問題をピックアップして作成しました。このマップは来年度の新一年生のサイクリングの授業で配布します。

今年度は発足の年として、活動の地盤を固めることを主に行ってきました。来年度からは、修理された自転車のレンタルやマップの設置場所の拡大、釧路市の企業との連携などをめざして、この活動を持続可能なものになるよう進めていく予定です。



自転車修理中の風景



修理済のリサイクル自転車



サイクリング・マップ

■ 大学祭での食器リユース活動

— 札幌校 環境サークルエコ☆プロジェクトZによる「藍涼祭食器リユース活動」 —

10月10日～12日に札幌校で開催された大学祭において、移動食器洗浄車・アラエール号を札幌市から借り、使い捨ての食器を使わず、レンタルの食器（皿・どんぶり・カップ・箸・スプーン等）1780点について、繰り返し洗浄・乾燥することにより、使い捨て食器の使用を大幅に節約することができました。

また、食器の回収と併せて、ゴミの分別回収も実施することで、資源リサイクルを推進することにもなりました。



■ ゴミ分別作戦

— 札幌校 グローカル環境教育チャレンジプロジェクト —

環境を守るために、まず身近なことからはじめなければいけないのではないかと考え、北海道教育大学札幌校でゴミ分別作戦というプロジェクトを開始しました。日ごろ行っているゴミ分別に対する人々の意識を調査するために、まずコンビニや大学でのゴミ箱の中身のチェックを行いました。加え、実際にゴミ分別がどれほどの効果をあげているのかを調べるため、プラスチック分別工場やプラスチック油化処理施設などを見学し、ゴミ分別の有効性を調べました。その結果、ゴミ分別に対する意識は有るが徹底されていないということ、ゴミの分別がとても大切なことであり、環境保護に直結していることをメンバー全員が感じることができました。

このプロジェクトを通して環境保護をするためには、排出されるゴミの量を削減することが最も簡単で効果的な環境保護方法だという結論に達しました。自分たちが行動に移すとともに、ゴミ問題を考えるためのゲームを作成し、専攻内で行い、意識の向上を促進しました。



ゴミ分別作戦報告書

■ 「北の川探検隊」パネル展

— 釧路校 グローカル環境教育チャレンジプロジェクト —

北海道とりわけ道東地域で、川探検活動を中心に地域の子もたちと自然体験活動を行っている「北の川探検隊」は今年で5周年を迎えることもあり、北海道教育大学釧路校及び根室標津町（世界自然遺産知床半島の付け根に位置し、知床の自然やその自然に支えられた地域社会の地でもある）において、これまでの活動の成果を「パネル展」及び「活動紹介パンフレット」によって公開し、自然教育、地域理解教育、環境教育にかかわる普及活動を行いました。

パネル展は北海道教育大学釧路校及び、根室館内標津町生涯学習センター「あすばる」ホールにて開催し、多くの見学者を得ることができました。特に標津町では、教育委員会との共催の形で展示を行い、広く町内に宣伝し、参加する子どもたちの保護者をはじめとする地域の方々に、北の川探検隊の活動を良く知ってもらうことができました。



北の川探検隊活動風景

(1) 学生による地域及び社会活動

■ iwamizawa 90° (キュウマル) スタンディングプロジェクト

—岩見沢校 チャレンジプロジェクト—

「iwamizawa90° (キュウマル)スタンディングプロジェクト」とは、岩見沢で空き店舗を改装し、作品や芸術活動の発表及び継続的な活動を目指す展覧会を行うギャラリーとして、または共同で制作活動をするアトリエとして、そのほか様々なイベントを行う拠点としてのオルタナティブスペース（多目的施設）を作るプロジェクトです。

プロジェクトの第一の目的は、自分たちの手で自分たちの発表場所を作り出し、さらに次の世代や人に繋げていく建物としてのハードをつくること、そして新しい展覧会形式のモデルタイプというソフトを提案するということです。また、岩見沢においてアートを発信する下地として、大学以外での外の世界との繋がりを作る接点としての学生主体のオルタナティブスペースを立ち上げるということは、単純にその建物でのみ活動が行なわれるということではなく、それがひとつのキッカケとなりさまざまな相互作用を期待するものです。その点において、現在も「iwamizawa90°」は道内外で活躍するアーティストやディレクターのレクチャーや、ワークショップ、街づくりのプロジェクトが行なわれており、その段階で多くの岩見沢市民や行政の協力を得ることが出来、同時に札幌のアートシーンにも大きな反響を呼んでいます。

また、建物の改装や壁画制作などの共同作業を通して、札幌校と岩見沢校との人間関係が深まることは言うまでもありません。壁画制作でも、地域住民の反応が高く、特にペンキ塗りなどの作業はその空間に対して愛着を持つことが出来、達成感が大きいものでした。

「越後妻有トリエンナーレ」や「ゼロダテ」など、地方でのさまざまなアートイベントや活動が注目される中、岩見沢という地域での独自性やポテンシャルを発揮するような一過性の、単なる町内会でのイベントか、老人ホームのバザー以上の、文化的レベルの高い活動をするためには人脈や人間力、市民の意識の向上などさまざまな準備期間が必要となります。その意味で、今回のプロジェクトは学生にとってスケジュールのきつく、さまざまな要素が内蔵するいわば「鍛錬的なプロジェクト」であり、そのレベルの向上と、岩見沢で今までにないアートプロジェクトの提案として非常に大きな提起ができたと自負しています。

今後も、「iwamizawa90°」という建物をひとつの機軸として、他のイベントや団体などとの連携を含め、より良い状況を作り出していくことが期待できます。



改装前の90°ギャラリー



改装風景（床はがし）



改装後の90°ギャラリー

■ あいの里の子どもとアフリカの子どもをつなぐプロジェクト

—札幌校 チャレンジプロジェクト—

日本にいる私たちが持つアフリカのイメージについて考えたとき、マスメディアから入ってくるアフリカの映像やニュースを見て、「貧しい国」「かわいそう」というイメージをもつ人が多いと考えられます。確かにアフリカの国々が「貧困」「飢餓」「エイズ」「紛争」など解決しなければならない多くの問題を抱えていることは事実です。しかし、あまりにも多くのマイナスイメージに埋もれてしまっている「ステキなアフリカ」がたくさんあることも事実です。北海道教育大学札幌校ではアフリカの写真やアフリカの子どもたちが書いた絵をもとにした、アフリカ子ども展をおこない、そんな「ステキなアフリカ」を伝える活動を行いました。

総合学習開発専攻国際理解グループに所属する学生たちを中心に2008年12月22日～29日にエチオピアを訪問し、子どもたちとの交流やインタビューを通してアフリカの子どもたちが笑顔にあふれていることや、日本の子どもたちと同じように学習し、夢を持っていることを知ることができました。その訪問をもとに、アフリカ子ども展をおこない、学生及び地域の方々伝える活動を行いました。今後、アフリカ子ども展によるあいの里の子どもたちとの交流等を実施していきたいと考えています。



インタビュー風景



アフリカ子ども展風景

■ 北海道立近代美術館と岩見沢校の連携による企画展

「フレッシュ・アイズ～北海道美術再見～」を開催

本学岩見沢校の学生が自由な発想の中で、展示に工夫を凝らした企画展「フレッシュ・アイズ～北海道美術再見～」を、北海道立近代美術館で開催しました。

この企画展は、相互協力協定を締結している北海道立近代美術館との連携事業として実施されたもので、企画に携わった学生は、平成18年度に岩見沢校芸術課程に入学した学生22名です。

この22名の学生が、自ら担当作品を選び、展示プランを考え、来館者の皆さんに見ていただくという企画展であり、公共の美術館で展示会を企画し、見ていただくことへの自覚と責任をもって作り上げた渾身の企画展です。

将来、地域社会における文化の担い手となる学生たちの新鮮な視点と、斬新なアイデアを感じてもらいました。



(2) 大学の取り組み状況

■ エデュケーション・カフェを開催しました。

学校現場を経験してきた本学教員や学生が、直接高校生と小学校の授業を作りあげていく中で、高校生や本学学生が教師の仕事について考え、教育についてより理解を深めることを目的に「エデュケーション・カフェ」と題した事業を旭川及び釧路のキャンパスで開催しました。

本学の学生の援助を受けながら授業作りを行った高校生のアンケートには、「先生という仕事の大切さや、授業を行うということの難しさを今まで以上に感じた」あるいは、「参加によりこれまで以上に学校の先生になりたいと思った」という反応があり、教師という仕事について深く考える場となったものと思われます。



旭川キャンパスでの風景



釧路キャンパスでの風景

■ 「食と農をつなぐ教育フォーラム～地域の宝は元気な子ども」を開催しました。

平成21年3月1日(日)、本学、北海道教育委員会、札幌市教育委員会が組織する北海道地域教育連携推進協議会は、J Aグループ北海道、北海道フットボールクラブと「食と農をつなぐ教育フォーラム～地域の宝は元気な子ども」を札幌市内で開催し、230名を超える一般市民らが参加しました。

このフォーラムは、食育、食農教育の視点に、北海道の子どもの体力低下をテーマに加え、農業、スポーツ、教育のそれぞれに責任を持つ機関が一同に集う全国的にも際だったものとなりました。

当日は、本間謙二学長、矢萩竹美北海道フットボールクラブ社長の挨拶の後、事例発表では、本学から、同大の授業科目「食・生活教育論」で実施した稲作体験塾、調理実習の取り組みの報告、北海道フットボールクラブから、コンサドーレ札幌の選手の体づくりに必要な食事に関する報告、J A道央青年部からは、小学生との交流事業で小麦や大豆栽培、加工を体験させるグリーンスクールの取り組みに関する報告、札幌市教育委員会からは、学校給食の残飯を利用したフードリサイクルの取り組みが発表されました。

引き続き行われた基調講演では、本学の須田康之教授が、平成19・20年度の2カ年に渡って実施した「北海道の子どもの体力・運動能力と生活実態」の研究成果から、子どもの体力の低下と生活実態との関係性について、朝食としっかりととることや規則正しい生活の重要性を強調しました。

パネルディスカッションでは、J Aグループ北海道中央会会長 飛田稔章さん、コンサドーレ札幌U-12コーチ 川口卓哉さん、本学の前田賢次准教授、札幌校総合学習開発専攻3年の家登裕美さん、芽室町教育委員会子育て支援課主任保健師 本内紀美子さんが、「食育と子どもの豊かな成長や体づくり」などについて語り合い、「食育、食農教育及び農業体験学習を広げ『命の大切さ』を伝えよう」など活発な意見が出されていました。



■ 平成20年度人権相談員研修を実施しました。

本学は、これまでキャンパス毎に対応していたセクシュアル・ハラスメント防止体制を強化するため、2006年度に「人権侵害の防止等に関する規則」を制定しており、この規則に基づき今年度新たに選出した者、昨年度の研修に参加できなかった人権相談員計13名に対しての人権相談員研修を、去る平成20年8月8日（金）に実施しました。

札幌校 笹谷春美教授による「キャンパス・ハラスメントの現状と課題」と題した講演では、大学におけるハラスメントの特徴や、本学のハラスメント防止体制、現状及び今後の課題を、例を交えながら説明し、また、保健管理センター三上謙一講師による「相談員のためのカウンセリング技術」では、受講者が相談者及び相談員となって、「自分が本当の相談者になったつもり」で相談し、相談員は「本番さながらに相手の話に耳を傾ける」ロールプレイを行ったり、相談員が陥りがちな対応例を説明するなど、受験生にとって有意義な研修となりました。

本学では、今後も、人権侵害による相談窓口周知用のパンフレット作成や講演会実施などによる各種啓蒙活動の強化等、人権侵害による被害を防止するための取り組みを継続して行っていくこととしています。



■ 男女共同参画

北海道教育大学は、2007年3月に新たに設置した「男女共同参画推進会議」の事業として、平成21年1月8日（木）、札幌キャンパスにおいてハラスメントに関する講演会を開催し、同時に、道内4箇所（函館、旭川、釧路、岩見沢）に所在するキャンパスへ、TV会議システムを使用し配信しました。

講演会は、東北大学高等教育開発推進センターの吉武清實教授を講師に招き、「大学におけるハラスメント防止について」というテーマで講演いただきました。

講演の中で吉武教授は、ハラスメントが発生するまでの経緯、ハラスメントが起きた場合の対応から、その防止方法などについて、具体的な例を交えながら、わかりやすく説明されました。

講演終了後には質疑応答も行われ、参加した教職員並びに学生約130名の参加者にとって、有意義な講演会となりました。



環境省「環境報告書ガイドライン2007」との対照表

項目	掲載ページ	項目	掲載ページ
基本的項目		(11) 環境に配慮した新技術、DfE等の研究開発の状況	該当なし
(1) 経営責任者の緒言	1	(12) 生物多様性の保全と生物資源の持続可能な利用の状況	該当なし
(2) 報告に当たっての基本的要件		(13) 環境コミュニケーションの状況	11
報告の対象組織・期間・分野	0	(14) 環境に関する社会的貢献活動の状況	24-29
報告対象組織の範囲と負荷の補足状況	0	(15) 環境負荷低減に資する製品・サービスの状況	18-20
(3) 事業の概況	2-3	オペレーション指標	
(4) 環境報告の概要		(16) 総エネルギー投入量及びその低減対策	10,12
主要な指標等の一覧	12-13,17	(17) 総物質投入量及びその低減対策	10,13,28-29
環境配慮の取組に関する目標、計画及び実績等の総括	9	(18) 水資源投入量及びその低減対策	10,13
(5) マテリアルバランス	10	(19) 事業エリア内で循環的利用を行っている物質等	該当なし
環境マネジメント指標		(20) 総製品生産量又は総商品販売量	該当なし
(6) 環境マネジメントの状況		(21) 温室効果ガスの排出量及びその低減対策	12
事業活動における環境配慮の方針	8	(22) 大気汚染、生活環境に係る負荷量及びその低減対策	14
環境マネジメントシステムの状況	8, 11	(23) 化学物質排出量、移動量及びその低減対策	15-17
(7) 環境に関する規制遵守の状況	15-16	(24) 廃棄物等総排出量、廃棄物最終処分量及びその低減対策	10,13,28-29
(8) 環境会計情報	10	(25) 総排水量及びその低減対策	13
(9) サプライチェーンマネジメント等の状況	11	社会的取組の状況	
(10) グリーン購入の状況及びその推進方策	14	(26) 社会的取組の状況	30-33



シンボルマークについて

「hue」は北海道教育大学（Hokkaido University of Education）の頭文字からネーミングされており、
「h」には人間らしさ（humanity）や希望，期待（hope）
「u」には調和，協調（unity）や普遍性（universal）
「e」には力強さ（energy）
の意味を込めています。

「五つの星」は，5校を表すとともに，教育（Education）の頭文字のEを形作っており，北天の星の一つであるカシオペア座（北極星を見いだす目印）をも意味します。
なお，このシンボルマークの愛称を「ヒューマーク」としています。